
無題

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題

【コード】

N2833C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

指先の痛み。吸い込まれる針先。あふれる血の色。

赤みがかつた指先に、細い、銀色の針が埋まっていた。異物が侵入する感覚に、内側からじんじんとした痛みが広がる。けれども、退いてはいけない。痛みには慣れなくてはいけない。

1センチくらい刺して、そして、引き抜く。針の先には少量、血がまとわりついている。赤い、普通の血液。人間の血。

傷口からはゆるゆると、赤い液体があふれ出す。私はそれを、ただ見ていた。

内側から、ひきつれるような痛みがはしる。脈にあわせて痛む指先。わたしは舌の先で、かるく、孔を押さえた。

鉄くさい香りが鼻先をかすめる。血の味は潮の味にも似ている。

海水にへモグロビンを混ぜてもっと汚らしくしたら、きつとこんなものができる。

適当なところで舌を離して、一番大きいばんそうこうを巻いた。

なんとなく、落ち着く。

私は涙を流せない。だから、代わりに、こうして血を流す。血は涙の代わりなのだ。

どういうわけか私は、本当に必要なときには泣けなかった。さつきから、むしように泣きたくて仕方がないのに、どんなにしばっても涙は出てこない。くぐもった声がのどの奥で不気味に渦巻いているだけだ。

私は椅子から立ち上がる。勉強机のすぐ脇にある、ふとんをくしやくしやに丸めたままのベッドに横になった。

天井を見上げた。しみのような木目がいくつも浮いている。まるで人の顔のようだ。

嘆き悲しむ女の顔。それが一番多いと思った。

そのとき、ドアが遠慮がちにノックされる音が聞こえてきた。

私は答えない。ドアは神経質に、何度も、等間隔で叩かれる。

両手できつく耳をふさいだ。次に聞こえてくるのが母親の声だと、私はもう知っているからだ。

聞きたくなかった。あんな女の声など。

どうして私をひとりにおいてくれないのだろう。私はこのままがかまわないのに。

そつと、この薄闇に包まれた部屋の中で、ひとり、過ごしていられば満足なのに。

もちろん、彼女は、違うと言うのだろうとわかっている。

そんなものは幸せではないのだと言うに違いないのだ。本当の幸せがなんなのか、自分ですらわかっていないというのに、彼女はいつもそうだ。えらそうに、私をつかまえてはこごとを言う。どうだっていいことを延々と私に聞かせるのが楽しいのかもしれない。

やがて、意味のわからない音がなくなって、足音が遠ざかっていった。私はやつと安堵する。身体力を抜いて、目を閉じる。

まぶたの裏には、海が映っている。

寄せては返す波が私をさらう。

私をさらってどこかへ連れて行く。私は海水に洗われるうちに、肉がこそげ落とされて、骨だけの存在になっていく……。

骨は水の中だというのに、乾いた音を立てる。私はその響きにつままれて、胎児のようにとろとろ眠る。骨の眠りは穏やかなのだ。穏やかだからこそ、骨は永遠に眠っている。

そう、私は眠っていなければならぬ。眠っていなければならぬ、のだ。

枕の下に手を差し入れる。そこはひんやりと冷たい。

そしてそれよりもさらに冷たい、指先に触れるものがある。

私はそれを取り出して、顔の上にかかげた。

それは一振りのナイフだった。刃はとても薄い。鋭い。

実用性の薄そうな、儀礼用や装飾用のものを思わせるそれは、私の牙なのだ。

この部屋から引きずり出されることがあつたら、私はきつとこれ

を使う。

今は針を指先に刺して、それで満足しているけれど　いつかきつと、それではすまなくなる。

刃を入れるのは自分の腕かもしれない。もしかしたら、他人の胸かもしれない。それは今の私にはわからない。

あの人は　母親は知らない。どうして私がここにいるのか。どうして返事をしないのか。

まあ、それはどうでもいいこと。

私は涙の代わりに血を流し、そしてまぶたの裏にある海で骨となり、そのまま生涯を終えるだろう。それでかまわない。

私は胸の上に、冷たい刃を乗せた。抜き身のナイフを胸に乗せたままで、私はまた、目を閉じた。

今度は海を見るためではなく、闇の中へと身を投じるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2833c/>

無題

2010年10月17日08時13分発行